

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, July 30th, 1955. No. 281.

關西大學學報

昭和30年7月 第281号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十年七月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第二八一号



（わが幸は海のかなたに——ヨット部）

關西大學學報局



ハイデルベルクのネッカー河にかゝっている三つの橋のうち最も上手にあるカール・テオドル橋と左岸入口の門

去るか——勿論予定はオスナブリュック、ブレーメンを経てハムブルクへ向い北海へ出るのですが——実のところまだぼくにもはつきりしないのです。それで前述のように出発後すでに一カ月でもあり、幸いそこは雨だし(午後から降りだしました。ここへ来てはじめての雨です)それにネッカー河畔から通信する筈の羽野君との約束も果たしていないことでもあり、この好機にとばかり第一信を書きはじめたしだいです。

さて、「旅をすれば語ることが多い」というドイツの言葉があります。ぼくも一ヶ月

マルバツハから

アルト・ハイデルベルクへ

上 道 直 夫

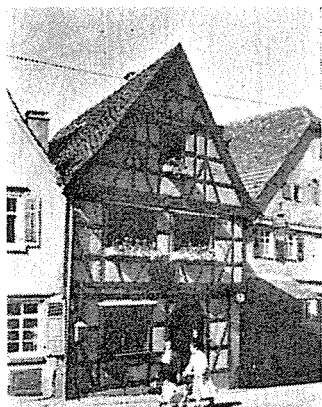
五月七日に大阪を出発したのですから今日でもう一カ月になります。しかしおかげでほんとに楽しい旅をつづけてきました。予定通り五月十一日すでに初夏のローマに到着以来、チューリヒ、ルツェルン、ベルンなどのスイスの町々を経て、五月二十二日スイスとドイツの国境の町 Schaffhausen 経由でいよいよ Stuttgart にはいりました。そしてシュトゥットガルトの一週間、ハイデルベルクの二日の後、シュトゥットガルト発ハムブルク行の遠距離急行列車「Merkur」で(この列車はわずか二輦の二等客車と食堂車だけの快速列車)途中ラインの流れなどを車窓から楽しみつゝ Münster i/Westf. に到着。翌三十一日からこの Borken というオランダの国境に近い Westmünsterland の小さな町に住みつくことになりました。というのはホテル生活ではあるものの何かしばらくの滞在という気持がしないのです。今のところいつこの町を

もためてしまったのでは、さて何から話していいのか迷うばかりです。それでイタリーとスイスの旅については今はただ特になんごらなお世話をいただいた方々を改めて思い出し、衷心より感謝の意を表するにとどめておきます。——ローマ大使館の石川氏、チューリヒ在住の St.Goertz 夫人、Bruno Schrobitz 夫妻(かつて神戸、大阪の総領事、現チューリヒ総領事)、ルツェルン在住の住友化学の福島氏、ベルン公使館の参事官須山氏、ぼくがベルンを発つまでの数時間公使館の車でベルン市の隅々から郊外に到るまで案内してま

わつてくれたフライブルク生れの青年。

※

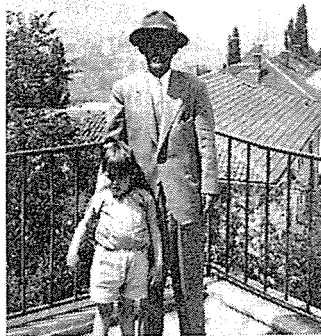
さて前述のごとく五月二十二日午後四時頃シュトゥットガルトに到着。Hotel Fürstenhof のレストランではやめに夕食をすませて繁華街 Königstraße などを散歩しました。ところどころまだ戦禍の址をとめてはいるもののさすがに西南ドイツの中心都市です。イタリイ、スイスからはいつて来たぼくには各国の観光客のほとんど目立たないのも何か気持をおちつかせてくれます。いつたいぼくはこの町へ行つても歩きまわることになっています。東京や大阪のような大都市に住んだものには平気です。びくともしません。それでも一度、夜のローマの街で方向をあやまつて困ったことがあります。だいたいローマの街頭では英語もドイツ語も役にたたないと思つてよろしい。幸いぼくのホテル、ミネルヴァがパンテオンのすぐ裏にあつたため、このパンテオンのおかげで救われました。道ゆく青年にぼくの英語よりもつとすごい英語でとにかくパンテオンへの道をおわかりました。ついでながらローマのタクシーはど古ぼけた見すばらしいのは他では見られません。そのかわり石畳の道をかたかたと音たてて



マルバツハに在るシラーの生家

ゆく辻馬車は古風でなかなかよろしい。毎朝ぼくはこの辻馬車の音が寺院の鐘の音で目がさめるのでした。シュトゥットガルトの二日目。局止めの三通の手紙を手にして、早速予定通り Institut für Auslandsbeziehungen に赴き Dr. Franz Thierfelder に面会。かねてから連絡はしてあったものの突然の訪問で却つて喜んで迎えてくれ、早速シュトゥットガルトにおけるぼくの差し当つてのスケジュールを組んでくれたりし、ぼくがとにかく先づ Städtische Bank へ行かねばならないのだと言うと親切にも所員の Fritz Kochwarze 君をわざわざ同伴させてくれました。おかげで一時間と待たないうちに、ぼくのドイツにおける滞在費の一部は現金、他はドルの旅行者小切手にすることが出来て大変助かりました。(日本ではドイツの滞在費を旅行者小切手にできなかったのです) 以後ぼくは毎日のように出かけて行つては、この敏腕なチェコスロバキヤ生れの三十五歳のコッホヴァサー君とドクターティアフルダーのお世話になりつづけたわけですが、当市の Prof. Dr. Fritz Martini に面会すると言えばわざわざ先方の都合をききあわせて自宅まで送りとどけてくれるし、ここから汽車で半時間ばかりのシラーの町 Marbach へ出かけると言えば適当な汽車の時間をしらべ、わざわざ駅まで見送つてくれるし、そのほか何から何まで非常な好意を示してくれました。さて翌日、半日をシラー生誕の町マルバッハですごしました。ネッカー河畔の、町全体が公園のような、絵のように美しい静かな町です。その町の上に高く後期ゴシックのアレクサンダー寺院の尖塔が聳えています。ぼくはここでこの寺院や、シラー生誕の家や、シラー国立博物館(これらについては、Schillerstad Marbach とする本と Schiller Nationalmuseum とする

小冊子に詳しい) などを見学してまわつたのですが、博物館では門限の六時になつてそろそろ掃除をはじめだしたので時間不足で少し心残りではありましたが外に出て、博物館前の広場をへだてて立つているシラー記念像の横のベンチでしばらく休み、駅に向いました。汽車を待つ二十分間、駅近くのささやかなレストランでビールを楽しんでいますと、折から程近いルートヴィヒスブルクから帰ってくる幾組かの労働者の男女の群で、ひと時この死んだような町も生氣をとりもどし、ぼくはやはり何かきびしい生活にふれた気持ちで帰路につきました。



高台から見渡せるシュトゥットガルト市

二十六日(木)はマルティーニ教授が講義のない日で自宅で待つていというので午前から午後にかけてゆつくりお目にかかることができました。彼は文芸学と美学の講座を担当し、今ニチエ以後の文学をハウプトマン以下主たる作家を中心に講義をすすめています。外貌は穏やかでも話しているうちにはなかなか熱情的で神経の鋭さがうかがえます。(因みに、ぼくは今、――「二十世紀のドイツ文学」一九五五年、ローテ版の中に彼の執筆している「表現派」を読みつづけています) ぼくはマルティーニ教授の口からはじめて

聞いて驚いたことですが、この九月五日から十日までウィーンで開かれる筈であつた第一回ゲルマニスト国際会議がその開催地をローマにうつした由――マルティーニ教授は参加すると言つていましたが、ぼくには今ともなればもう時期的に到底参加不可能、諦めましたが、そのかわりぼくのドイツ滞在期間がそれだけに自由になり却つて喜ばしいような気もするのは負けおしみだらうか? ぼくがぐれぐれも礼を述べて暇を告げると、教授は彼の著作「ゲーテ時代」に「シュトゥットガルトの思い出のために――一九五五年五月、F・マルティーニ」と書いてぼくに手渡し、絶えずぼくたちのそばをはなれない四歳になる次男をつれて、附近の、シュトゥットガルト全市を見渡せる高台まで見送つてくださいました。

この晩は、七時半から当市の市立劇場でシラーの「マリヤ・シュトゥアルト」に招待されている。はじめドクター、ティアフルダーの招待かと思つていたら、シュトゥットガルト市の客として市の文化局の招待であつたのには驚かされました。コッホヴァサー君がぼくの服装のことにまで注意するので尚さら驚かされたわけです。いづれにせよ、ぼくにとつてははじめて見るドイツの舞台です。日本の概念からいえば小劇場ですが、しかし一つの空席もなく、観客層も昼間街頭で見かける人々とは大分ちがうように見うけられます。今後ドイツ滞在中にはまだしばしばシラー劇を見ることが思いますが、強烈な舞台の印象とはじめて接する劇場の雰囲気とに、ぼくもこの夜はいささか昂奮し感激したことです。

※

ぼくはこの夜、急に二日後(二十八日)の午前、シュトゥットガルトをひとまず――勿論、もう一度必ず舞

ハイデルベルク

ヘルダーリン

森の小鳥が峰を越えて
飛び行く如く

おんみの側を通りて

ひかり輝く^{ながれ}河流の上に

軽やかにまた力強く

円弧を描いて掛かる橋

車や人の行き交う

^{おとない}音響^{おとない}乗せて。(オ二聯)



いもどつてくるのですが——去ることにきめました。
最初ぼくはシュトゥットガルトには一カ月近くも滞在の
予定でした。ここで為すべきことが多いのです。この
出版都市にありながら、ぼくはまだ数冊の辞書類を大
阪へ送らせたにすぎないのです。購入すべき幾冊かの
書籍と雑誌をすでに見つけてもあるのです。それに何
よりもうれしいことはこの親切な方々が長期の滞在
をすすめてくださることです。にも拘らず二日後には

北へ向うことにきめたのです。実を言えば、ぼくは見
知らぬ外国へ来て、各地でかくまで暖かいもてなしを
うけようとは夢にも思っていなかったのです。ぼくの
心はいささか戸惑い気味なのです。と同時に甚だぜい
たくな言い分なのだが、ここらでもう少しのんびりと暫
らく休養したくなつたのです。少し疲れ気味なのです。
それにぼくは大阪を出るときから何かの時には十分に
休息できそうな一つの小さな町を知っているのです。

それが Borken で、ぼくの家族みなと親しい二人の
少女がいつくるかと待っていてくれるのです。

※

シュトゥットガルトの人々には再会を約し、前述のよ
うにぼくは Merkur で北へ向いました。しかしさ
すがにハイデルベルクは素通りも出来ず雨のハイデル
ベルクの新装なつたハウプトバーンホーフに途中下車し
ました。勿論ここでも二人の教授——Dr. Dietrich Sek-
kel, Dr. Müller-Chappuis——に面会することにな
つていたからでもあります。……しかしもう随分長く
書きましたので、今日はこのあたりで筆をとめたいと
思いますが——このボルケンに来てもう一週間になり
ましようか？のどかな気持でゆつくり休養していま
す。この一週間うらかな日和つづきで、この自然
は今花盛りです。すべての花が一時に咲きだしたかの
ようで、赤と白のカスターニエンの花はもう盛りもす
ぎたようですが、ロートドルンの花や、牧場にはぼく
たちにも親しい三色堇や水色の可憐な忽忘草にいたる
まで咲きそろつていて、森では郭公が啼いています。
町の人々とも親しくなつて、ぼくはまるで大阪にいる
ようにドイツの生活を味い楽しんでいきます。それでも
或る日、突然 Westfälische Rundschau の新聞記者が
面会に来たかと思うと——

Professor Uemichi, Osaka (Japan)

Ein Prominenter Gast in Borken

という見出しで、紙面の四分の一、写真入りの大きな
記事が出たりしました。……余り長くなります。また
書くことにして、末筆ながら関西大学関係者各位の御
健勝を遙かに祈り申上ります。

一九五五年六月十五日ボルケンにて

(文学部教授)

學内報

北陸、東海各地で

「関西大学の夕」

本年度の「関西大学の夕」は、コースを北陸、東海地方に選び、大学の行うPR運動の一週として、七月七日より同十四日まで一週間、福井、金沢、富山、岐阜、名古屋、大津等各地に進出し、木村理事をはじめ中谷敬滋(法)、堀正人(文)、松原藤由(経)、板橋菊松(商)、山田松太郎(学生部長)、榎本金次郎(学生部長)、各教授、鉄井学生課長、山村、出水両職員に学生三十二名参加して、学術講演会を開き、また学生の弁論、軽音楽演奏、映画などを行い、各地で校友の絶大な後援をうけるなど親睦を重ねると共に、一般市民に感銘を与え、本学の声価を一段と高めた。

なお各地における開催地、会場、後援団体は左の通りである。

- 福井市(公会堂) 福井県教育委員会 福井新聞
- 金沢市(公会堂) 石川県教育委員会 北国新聞
- 富山市(公会堂) 富山県教育委員会 富山新聞
- 岐阜市(公会堂) 岐阜県教育委員会 岐阜タイムス
- 名古屋(商工館) 中部日本新聞
- 大津市(滋賀会館) 滋賀県教育委員会 滋賀教育委員会 大津市教育委員会 滋賀会館

福本、森川、矢口各教授に

文部省科学研究費

昭和三十年度文部省科学研究費交付金(各個研究)の審査結果は、この程内定

通知があつたが、本学では福本(文学部)森川(経済学部)、矢口(同前)、各教授が受領することになった。

十七世紀独逸文語史を中心としてみた

外来語の研究 福本喜之助

日、米、英銀行機能の比較研究 森川太郎

一、二次大戦後の変化を中心として 矢口孝次郎

イギリス羊毛工業史の研究 森川太郎

島根大学と共同 陰岐綜合文化調査

昨年の夏からはじめた本学と島根大学と共同による陰岐綜合文化調査は、本年も引きつづいて七月二十五日より八月十日まで行うことになった。

本学からは高橋盛孝(民俗学)、横田健一(国史)、末永雅雄(考古学)、井上吉次郎(社会学)各教授のほか学生四名が参加している。

各地に調査班研究出張

一、法意識実態調査

関西大学千里山法律学会では、前年に引つづいて本年は、七月二十日より同二十五日まで福岡県宗像郡玄海町種崎地方へ出張し、海女における法意識、特種慣習と近代法、親族組織と個々の家族等興味あるテーマについて実態調査を行った。

調査員は同会の学生約三十名程であるが、法学部木村、中谷、福島各教授、石尾助教、猪熊講師(京大教授)、春原理事らが指導にあたることになっている。

二、農村実態調査

経済学部東井正美助教のゼミナールでは、八月二十七日より九月一日まで和歌山県東牟婁郡四村において、相続慣行の社会経済的諸関係からする考察の実態調査を行う。学生十五名参加。

人事移動

昭和二十九年十二月三十一日

願に依り職を解く 渡辺宗太郎

昭和三十年一月一日

昭和二十九年度本学講師を委嘱する

昭和三十年三月三十一日

職員任免規定第十六条第一号に依り職を解く 河村信一

職員任免規定第十六条第一号に依り職を解く 藤田進一郎

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

昭和三十年四月一日

- 沼田昭夫 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 安川 昭夫 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 河崎章夫 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 森省三 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 西田一郎 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 岸井貞男 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 松谷勉 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 佐藤博 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 重田晃一 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 戒田郁夫 昭和三十年四月一日 本六文学部副手を命ずる
- 和田豊二 昭和三十年七月一日 短期大学部長を命ずる
- 佐伯三郎 昭和三十年六月三十日 任期満了につき短期大学部長代理を免ずる
- 富山忠三 昭和三十年七月一日 短期大学部長代理を命ずる
- 富山忠三 昭和三十年六月三十日 任期満了につき短期大学部長代理を免ずる
- 西田一郎 昭和三十年六月三十日 願に依り職を解く



(3) 大市大 5勝4敗1分 (4) 和 大 4勝4敗2分
(5) 阪 大 2勝8敗 (6) 神 大 1勝9敗

映画研究部

映画研究部では六月十一日(土) 夜五時より中之島中央公会堂に於て、第九回「講演と映画の夕べ」を開催した。

講師 朝日新聞社学芸部

映画 「探偵物語」 篠田 一 郎 氏

拳 斗 部

第八回関西学生ボクシングリーグ最終日は、六月六日大阪府立体育館で開催されたが、既に関大の優勝が決定しているといえ、伝統の関々戦に期待が寄せられたが、一方的に関学を圧倒し9-0で勝ち、五戦全勝という見事な戦績で通算七度目の優勝をなし上げた。当日の戦績は次の通りである。

6月6日 関大9-0 関学 於府立体育館

ジュニア級

○牧 判定 芝

フライ級

○佐藤 判定 中塚

バンタム級

○小川 判定 辻本

フェザー級

○久富 判定 坂東

ライト級

○稲葉 判定 峯崎

ウェルター級

○遠藤 判定 中村

関西リーグの優勝をなし上げた当部は、全日本の王座を、関東リーグの勝者日大と、六月十八日東京、国際スタジアムで、その覇を争った。戦前圧倒的に日大の優勢が伝えられたが、本学は日大のホオムグランドという不利の条件にもかかわらず、日大5-3本学で惜しくも覇権を逸した。

6月18日日大5-3 関大 於国際スタジアム

フライ級

○外崎 判定 鷺見

バンタム級

○藤原 判定 佐藤

フェザー級

○三井 判定 小川

ライト級

○堀山 判定 三國

ウェルター級

○加藤 判定 久富

川城 判定 遠藤

学 術 論 文 募 集

関西大学創立七十周年記念事業の一つとして左の規定により本学学生諸君の学術論文を募集します。学生諸君の研究成果を発表する絶好の機会ですから奮って応募せられることを希望します。

関西大学創立七十周年記念行事実行委員会

募集規定

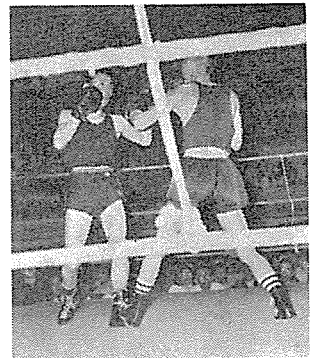
一、応募者は関西大学各学部及び短期大学の学生に限る。

一、論題は法学・文学・経済学・商学の四部門に関する随意の論題とする。

一、原稿枚数は四〇〇字詰原稿紙三〇枚を限度とする。

一、メ切期日は昭和三十年九月二十日とする。応募論文の旨を明記して、各学部教務課を通じ委員会宛提出すること。

硬式野球部



関西六大学春季リーグ戦は同志社大の(8頁下段へ続く)

ホッケー部

文化祭を頂点として、学生の学友会活動は、夏季休暇をひかえ、地方への合宿、遠征、実態調査等による地方との学術、文化、体育の交流を計かろうとしている。過去一ヶ月文化祭(前号記載)を中心として繰り展げられた学生の動きを拾うと次のようなものである。

五月二十九日西宮球技場で、関西学生ホッケー最終戦が行われたが本学は、大市大を破り遂に12連勝をなしとげた。

関大 11(47-10) 0 大市大

順位(1)関大10戦全勝 (2)関学 6勝3敗1分



校友 バツチ

校

友

熊本支部創立総会

昨年春以来有志の間で支部設立の為数度会合し種々検討をして来た懸案の熊本支部の設立は、五月十五日熊本市内銀丁百貨店食堂に於て母校より春原理事を迎えて開催。出席者は少なかつたが久し振りに母校の発展状況を聞く事が出来、和やかな雰囲気の中に会則役員を決定した。

支部長 内田 義信
副支部長 小泉 博
幹事 齊藤 猛(会計)
橋本 勇 堤 治助 川越 茂樹
前田 福人 北里善四郎 豊永 吉弘
事務所 熊本市花畑町三番地 宇野 正人
支部長宅 電話二四六七番
出席者 大学側 春原理事
支部側 小泉 博 齊藤 猛
川越 茂樹 松岡 寿雄
内田 義信 宇野 正人

西成支部創立総会

四月十九日玉出光福寺に於て西成支部創立総会を開催。出席者二十一名役員選出の後、次期総会の盛会を約して散会。支部所在地 大阪市西成区橋通二丁目七番地
今井司方(電話66三三九六)

支部長 今井 司
副支部長 田中俊一 山田信夫
幹事長 島谷直治
幹事 A地区 島谷直治 畑井 昇
(鶴見橋通以北東地区)

B地区 小林正立 畑中利夫
(鶴見橋通柳通間東部地区)
C地区 金井清重 岡本博孝
(柳通、玉出本通間東部地区)
D地区 由本 保 久員博信
(鶴見橋通以北西部地区)
E地区 内貴基祐 西尾泰治
(柳通玉出本通間西部地区)
相談役 市岡 勲 大井吾吾 森 紅子
市岡保徳 浅見義雄
顧問 三谷久雄 東 正治

双龍会総会

五月十七日午後六時より南ミューンヘン三階別室に於て双龍会総会を開催。奈良から藤塚、神戸から早助の両氏が遠路出席、会にとつて最も馴染みの深い和田豊二先生を囲み、想ひ出話に初夏のひとときを過し、名残りを惜しみつつ解散。

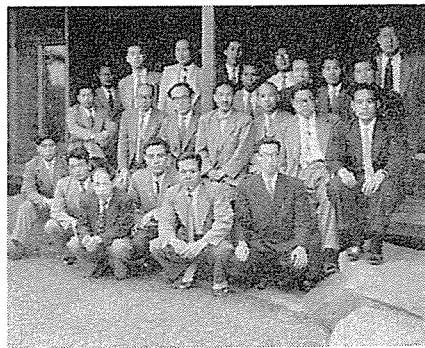


双龍会総会

出席者 来賓 和田豊二教授
会員 金哲根 弓場晴男 丸尾実 藤塚嘉治
島吉衛 山下為次郎 辻忠勝 早助芳一
井上隆 坂本龍夫

神戸市役所関大クラブ総会

五月二十一日(土)午後二時より垂水臨海荘に於て神戸市役所関大クラブ定時総会を開催。先づ山本会長挨拶に始まり昭和二十九年度決算報告ならびに事業報告の後、昭和三十年年度予算案及び事業計画の審議の後、安井校友課長より伸びゆく母校の近況と校友会の活躍状況の報告あり、一同在学時代の追憶にふける。記念撮影の後、懇談会に入り午後五時散会、出席者二十九名



神戸市役所関大クラブ総会

出席者

大学側 安井校友課長
会員 山本鎮郎 瀬郷清市 松島亨喜三 福田勇
安井利一 塚原茂 高見秀雄 橋根義立 木谷奈
美男 志水泰之 三方三好 新宝信次 福島敏
雄 井置武嘉 大西忠三郎 上崎栄司 田尻芳
信 白木勲 増田正 津村泰三郎 浜口武久
幾島武夫 岡野重三郎 浅利義文 大賀二郎
垂井圭司 蛭田高輝 吉田貞澄

福井支部総会

五月二十七日午後七時母校より岩崎学長を迎え、景勝の地足羽山麓、緑につま

石川支部総会

石川支部総会には新緑したたる五月二十九日午後五時より兼六公園内三芳庵に於て開催。学校側からは岩崎学長が出席、母校の近況、将来の希望等を語り一同想い出話に有意義なひとときを過し散会。



石川支部総会

まれた会場に校友十二名参集して開催。久し振りに相見の岩崎学長を囲んで、話題は懐古と追憶につながり、やがて学長より聴く莊大なる学園の全貌に想ひを至して、時の移るのを忘れ、学歌斉唱を最後に名残りを惜しみつつ、旧情を胸に抱き閉会。

出席者 岩崎学長
支部側 小寺藤作 御堂河内四市 千田林作 川上
清三 堂河内繁信 中村竜公 村井照三郎 北
山穂夫 木下善平 五十嵐一榮 池端庄三
口俊雄

出席者

大學側 岩崎學長
 會員 中西与七 小間井与一 木梨与松 木村佐太郎 上村勝美 角井健治 松林禎作 本井基樹 和田篤介 梅田章 渡辺敏夫

富山支部總會

五月三十日(月)富山駅前「樹常」に於て、母校より岩崎學長、矢野常務監事を迎えて開催。

安田常務幹事の開会の辭、宮本副支部長の挨拶(古屋支部長は全國弁護士會に富山弁護士會長として出席の爲上京中)幹事より七月九日富山市公會堂に於て開催予定の「関大の夕」についての準備状況の報告を行い、当日は支部校友は総力を挙げて後援、又母校拡充資金の募集は、出席者は勿論欠席者にも充分連絡して募金活動を強力に遂行する事を約す。

役員改選後、岩崎學長、矢野常務監事より母校の近況報告あつて懇親会に入り母校の想ひ出、校友の近況等話題の盡きぬまゝ、母校及び校友会の万才を三唱再会を約して和氣鬨々の裡に解散。

当日決した役員

支部長 古屋 東
 副支部長 宮本五郎 栗山基一 児玉信治郎
 常任幹事 安田倫藏

幹事

(富山地区) 川西庄造 延谷謙三 若林政治郎
 犬島 潔

(奥東地区) 杉田信義 吉田安秀 矢内原和一

(奥西地区) 米田 実 福田正恒 釣谷 巖
 金森東一

出席者

米 實 岩崎學長 矢野常務監事
 中西石川支部長
 支部側 宮本五郎 若林政次郎 杉田信義 安田倫藏 橋詰兼義 犬島 潔 金森東一 川西庄造 矢内原和一 釣谷 巖 延谷謙三 中島正夫 福田信雄 寛田義太郎

千里山昭八会

六月十日(金)午後六時より国鉄豊崎寮に於て第三十三回例会を開催。先づ幹事立つて四国から大鉄局に榮転し來つた中村重男氏を、また中河内郡志紀村の村長さんに當選した田坪弘氏を紹介し、お互いの健在を祝し二十年振りの喜びを露わした。更に酔わないうちに母校七十周年記念拡充寄附金の勧誘と、申込者に対しては払込みの依頼兼督促状を発送したので一層の御協力方を懇請して小宴に入つた。

今回は中村、田坪両氏を中心に、之に結城、北村の阿快弁家が力を添えたので出席者は少なかつたが、近來稀に見る愉快な例会であつた。次回は七月二十三、四日の両日に亘り舞子寮に於て開催することを甲合せ、学生時代に知れる歌を全部次ぎ次ぎに合唱、最後に學歌を高唱し午後九時半散会。

当日の出席者

浦野健二郎 田坪弘 中村重男 大島武夫 中江 翼 美吉兄之祐 田辺卓起 結城内太 北村文之助 西田春造 吉田一郎 中家利国 斉藤正典 広田憲信 平井三朗

(6頁よりつづく)

優勝が決定していたが、二位を賭けた伝統の関々戦が、六月四、五の両日、日生球場で行われた。本学投手の不調、不運な失策等により豊富な人材を擁し乍ら、充分の力を出しきることなく、二連敗したが、春には優勝出来ないうちに、秋の奮起が望まれている。

6月4日	関学8	7	関大	於日生球場
関学大	0 0 0 2	3 1 0 0	1 2 0 0 1	7 8
関学大	0 0 1 0	0 0 1 1	3 0 1 A 0	7 4

レスリング部

関西学生レスリング・リーグ戦最終日は、六月十二日、同志社大体育館で開かれたが、決勝は、三勝同士の関大、関学

校友新聞についてお知らせ

校友新聞には従来「関大」と「関大校友新聞」とがありましたが、諸般の事情より両紙の統合を要望され、この程協議の結果七月一日を以て合併し、校友新聞「関大」としてその機能を果たすことになりました。

昭和三十年七月一日

關西大學校友會

の間で行われ、戦前の予想を破り、関学を7-2で圧倒し去つて二連勝をなし遂げた。

関大7-2 関学

フライ級	○岩田	巻固め	川崎
	○横山	体固め	田村
バンタム級	○岸本	判定	佐々木
	河竹	11分56秒	植木
フェザー級	町田	判定	奥村
	○坂	7分20秒	荒山
ライト級	○丸谷	判定	中西
	○乾	4分15秒	大崎
ウェルター級	○宇賀	判定	植田

関西リーグ順位は (1)関大4戦全勝 (2)関学3勝1敗 (3)同大2勝2敗 (4)近大1勝3敗 (5)名城大全敗

横山君ワルシヤワへ

先般の全米選手権大会でフライ級フリ1、グレコ・ローマンの両種目に優勝した横山勝利君は、八月一日より十四日までワルシヤワ(ポーランド)で開かれる国際平和青年スポーツ祭の日本代表として出場することになり、七月二十五日出発した。



感謝録

別項記載の通り、母校創立七十周年記念拡充資金寄附を募集致しました処、その趣旨に御賛同下さいまして陸続左記の通り御寄附をいただきました。七月十五日迄に拝受しました御寄附者の芳名を爰に録し、謹んで感謝の意を表します。

昭和三十年七月

学校法人 關西大學

關西大學七十周年記念

拡充資金寄附者芳名(十四)

昭和三十年七月十五日現在(順序不同、敬称略)

一、篤志家の部

金壹万円也

中尾 禎一

計金壹千円也

金壹千円也 多久 正紀

計金壹万円也

累計金五拾七万四千円也

累計金九百拾万九千五百円也

口、友 粹会

金壹万円也

二、関係業者の部

金壹万九千円也

美津濃株式会社

2クラブOB

累計金貳百九拾九万五千五百円也

金壹万円也

エミヤスポーツ

拳法部

金六千円也

大倉山診療所

金参千円也 真辺 光彌(昭29学一経)

金四千円也

楠田 商店

計金参千円也

累計金拾七万五千円也

計金参万九千円也

累計金四拾六万九千五百六拾円也

累計金八百七万七千七百七拾円也

三、校友の部

1 同期会

イ、昭八会

金貳千円也 吉村 政春(昭26学一経)

金貳千円也 田中 勉(昭19専二園瀧)

金貳千円也 中野龍太郎(昭27短六二)

金壹千円也 子浦 淳美(昭29大法)

金壹千円也 大野 正(昭30学一経)

金壹千円也 平井 修治(昭26学二園)

計金壹万円也

累計金八拾壹万八千壹百円也

累計金九百九拾壹万壹千六拾円也

四、教育後援会の部

金五千円也 小竹長三郎

金貳千円也 小原 熊藏

金貳千円也 尾上 一二

金壹千円也 守田 榮

金壹千円也 阿部 哲治

計金壹万壹千円也

累計金九百七拾万貳千六百円也

合計金五万四千五百円也

累計金四千五拾壹万八百九拾九円也

(合計、累計は重複申込を含まない)
(実寄附金額である)

昭和三十年七月三十日発行

關西大學學報 第二八一號

大阪府大淀区長柄中通二丁目二番地
編集兼 久 井 忠 雄
発行人 株式会社 ナニワ印刷所
印刷所 電話堀川(七三〇二番)
三一九三番

發行所 關西大學學報局
大阪府大淀区長柄中通二丁目
電話堀川(85)一七五六番
振替 大阪二六七二二番

寄附金分類別集計表

昭和三十年七月十日現在

申込種別	件数	金額
篤志家	7	9,219,500.00
関係業者	5	8,075,700.00
地方支部	3	4,612,000.00
職域会	2	4,000.00
同期会	7	3,920,000.00
同窓会	3	1,014,000.00
クラブOB会	5	4,960,000.00
個人	3	2,100.00
計	30	30,401,000.00
教育後援会	1	9,702,000.00
一高父兄会	2	3,240,000.00
学校法人役員	3	9,000,000.00
評議員	1	1,411,000.00
大 学	1	1,757,000.00
一 高	2	1,000,000.00
一 中	7	7,000,000.00
幼稚園	5	5,000.00
計	15	21,115,000.00
事務職員	2	1,014,000.00
重複額	1	4,960,000.00
差引合計		40,516,000.00
收納額		3,575,000.00
未收納額		37,941,000.00

關西大學創立七十周年記念 拡充資金募集趣意書

わが關西大學は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律学校として開校したのでありますが、爾來六十有年校友先輩の苦心と不断的努力に依つて目覚ましい發展を遂げ、今や一万数千の学徒を擁する私學の雄として、自他共に許す一大學園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、國家社會の進運に大きな寄与をなし得たことは、われわれの深く喜びとするところであります。學園發展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られません。

日本は、漸く獨立國家として出発しましたが、國家の前途は甚だ多難であります。わが國は今後、文化國家として世界文化に貢獻すべきであります、またそれによつて友邦の信に應えなければなりません、そのためには、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本學は、大學の崇高な使命を自覺すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその聲価を揚げて参りましたが、真理の討究、學の美化という理想に向つて、益々邁進したいと思ひます。本學が新學制に基き、各大學にさがけて、大學院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において將來の飛躍的な發展を意圖したからに外なりません。

本學は時代の趨勢に鑑み、曩に五ヶ年計畫を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大學院、大學ホール、経済学部 商学部教室の増築等はその一環として既に竣工しましたが、なお計畫中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山法学部 文学部學舎の改築、二部學生を收容するための天六學舎の増築、學生に対する施設の増設の一部として、千里山尚志館（學生食堂學友會部室）の増改築等でありますが、これらは逐次工事に着手し或は着工準備中であり、また教授研究室は、現在六十五室を有するに至つたのでありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代設備を持つ研究室の新築を構想中であり、これらが竣工の暁には學園は全く面目を一新すると思ひます。

こうした外觀の整備と相俟つて、特に重要なものは、大學の眞価を決する教授陣容の充實であります。二十八會計年度においては教授十名、助

教授八名、専任講師五名、助手十七名の増員を予定しましたが、その大半はすでに補充致しました。

教職員待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相当額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の經濟状態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。

教授陣容の充實と共に、研究用圖書の完備も大切であります、この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するものと考えられますが就中、學舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも總額約三億圓を要するのでありますが、戦後の經濟的混乱により本大學法人の經理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず關係者各位その他の御援助により御饒出を仰がねばならぬ実情にあります。

大學の生命は不朽であります、學園の生々發展を希うためには、各位の學園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、學園の繁榮を念願する各位の御賛同を請ひ、この七十周年記念事業の完成を期したいと思います。各位の御賛同により本事業完成の暁には、學園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な發展を期し得ることを信じます。何卒御協力の程切に願ひ上げます。

昭和二十八年十一月

關西大學學長 岩 川 朋 吉
關西大學理事長 白 川 朋 吉

創立七十周年記念事業學舎増改築概要

一、工事費總額約三億三千五百萬元

二、工事概要

- (一) 千里山法学部 文学部學舎改築（鉄筋コンクリート造）
三階建 二千六百六十八坪 工費約二億四千四百萬元
- (二) 天六學舎増築（鉄筋コンクリート造）
五階建 三百七十八坪 工費約三千萬元
- (三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建 三百二十一坪 工費約六百萬圓
- (四) 關西大學第一高等學校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建 七百八十五坪 工費約三千五百萬元